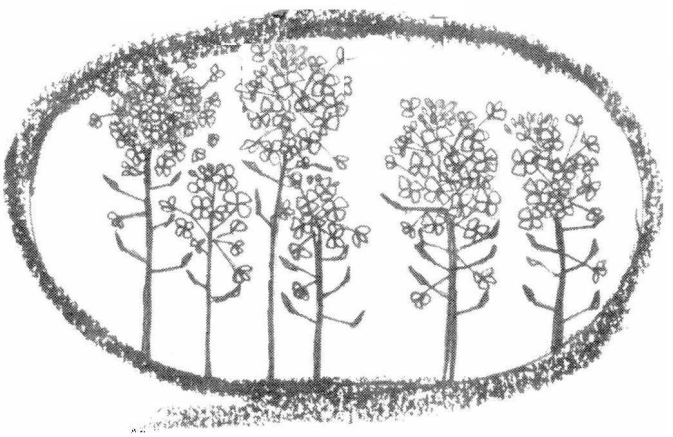
赤いフライパンに
菜の花のせて

浅野政枝

ミ モ ザ 書 房

赤いフライパンに菜の花のせて

浅野政枝



ミ モ ザ 書 房

著者プロフィール

1948年生まれ

上川郡和寒町に生まれる。

光塩学園女子短期大学卒業（食物栄養科）

1男の母

「赤いフライパンに菜の花のせて」　初版

定価　1000円

昭和63年4月30日印刷

昭和63年5月1日発行

発行者　浅　野　孝　幸

発行所　札幌市北区太平5条6丁目2－5

印刷所　札幌市西区手稲東3条北2丁目

有限会社曽我プリント

1988　Masae Asano

（落・乱丁本はお取替え致します）

赤いフライパンに菜の花のせて——目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

はじめに 9

I 五月の花

五月の花 13
お風呂今昔 18
切ない味噌汁 24
眼（まなこ） 28
核のゴミ 33
舶来品 36
見えない糸 42
父の歌 46
十五夜とススキ 51
胡桃（くるみ） 55
思い出の手袋 60
女の靴 64
左ききの今昔 68

赤の魔力　73
泥棒と麺棒　79
女の爪　85
女の鼻　91
口紅　95
ブラックボックス　100
三万六千四百個の卵　106
サンタクロース・さんたくろーす　112
釦の責任　118
俎（まないた）　123
懐中時計　126
湯湯婆（ゆたんぽ）　129

Ⅱ

悪妻のおここ

悪妻のおここ　133
白い牡丹餅　136

翡翠物語　140
古くて新しいおかず　146
傍の蕎麦　148
女ラーメン　155
豆・まめ・マメ　161
大豆を楽しむ　164
自慢の一品　165
とろろ芋　167
台所の蟻地獄　169
忍者野菜　171
ワタシはトマト　174
冷麺　177
赤いフライパン　181
納豆狂い　183

Ⅲ 嘘つかない玄関

嘘つかない玄関 189
シンデレラの靴 194
馬そり 197
木綿の歌 202
春の雪 207
筆記用具 211
未来風呂 214
自動販売機 220
再び学校給食について 226
考える足 228
丸い洗濯機 231
暮らしの美・木べら 240
夏の終わりに 243
牛乳の謎 247

Ⅵ お尻にハート

お尻にハート 257
学校給食 259
学校五日制に思う 261
教育雑誌の功罪 263
家庭学習 265
秋の夜長 267
年賀状の個性 269
主婦の死 271
もちまき 273
ささやかな工夫 275
三年保育の疑問 277
学習机 279
働き盛りの男性に 281
春の車粉 283

今の教育現場　285
昼食後の歯みがき　287
自ら学ぶ起爆剤　289
夏休み帳　291
ＰＴＡの原点　293
もっと託児室を　295
「君」と「さん」　297
習熟度指導　299
インフルエンザ予防接種　301
一期一会　303
あとがき　305

日本音楽著作権協会(出)許諾第八七六二四五七－七〇一号

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

はじめに

生きたあかしに一冊の本を完成

四年前のこと、当時小学二年生の息子に夕食後、漢字のおさらいをさせていた時、「お母さんはどうして勉強しないの」と言われ、返答に窮しました。その一言が頭に残り、カルチャースクールにでもと思い立ち、随筆教室に通い始めました。初めは原稿用紙の使い方すら知りませんでした。

それでも、大変良い講師に恵まれ、五十九年四月から書き始めたエッセーも、今では三百編を超えました。テーマは「現代子育て考」。女性が好む情感あふれるものは苦手で、つい握りこぶしを高々と上げ、こうあらねばならないといった主張を盛るエッセーが多くなります。「さっぽろ市民文芸」や道新の「読者の声」などに掲載され、たとえ一割でも活字になりますと、何か私の考えが認められた気がして、うれしい気分に浸ります。

こうして自信めいたものがわいてきますと、一冊の本にまとめて、生きてきたあかしにしてみたいと思うようになりました。文章をつづることには、華道や書道と違って免許や段位はありません。上達したと思った途端に二歩も三歩も後退します。でも、四年間に千数百枚の原稿を書きためてみると何歩かは進んだなあと自己満足もし、自らの励ましになります。それを一冊の本にと決意しました。

今年九月で私は不惑の四十路に突入します。自分の内外に惑いの多かった三十代を卒業する記念として、春のうちに本を完成させようと、夢は膨らむばかりです。

（'88・1・6　道新「読者の声」掲載）

五月の花

五月の花

『五月のばら』をテレビで聞いて、札幌の五月の花は何だろう？　と思った。

まず桜・梅・桃が一せいに踊り出すのを思い浮かべた。がこれらは『五月』には似合わない。この月には、春一番、秘めやかに咲くエゾムラサキツツジと目にまぶしい黄金色のレンギョウ、それに森の妖精の水仙がふさわしい。庭から雪が残っている山々に目を移すと、木々の小枝は萌黄色。その中に雪の女王が着ていた衣が千切れてひっかかったように咲いているのはコブシの花。森の貴婦人、カタクリの花もすてがたいが、まばゆい五月の空の色をぬすんだようなエゾエンゴサクが私の五月の花。少しばかり紫がかったのもあり、見る角度によって胸からお腹にかけてほんのりピンク色した青い鳥に見える花。

今も咲いているだろうか……。

あの花が水色の絨緞のように咲く地に私は十二歳まで住んでいた。昭和三十年代の上

川郡の泥炭地。和寒町字北原第三部落といっていた。旭川から汽車で約一時間、三浦綾子氏の小説になった『塩狩峠』を越えると和寒町、その少し北へ行くと東六線駅でその西側にピョッペ川と呼んでいた濁った小さい川が流れていた。川の西に広がる湿った平地が北原。和寒町の中で唯一、ランプを灯していた地域だったと思う。冷害と水害のくり返しの中、ブスブスいぶる泥炭を燃やして卵ほどの小さな水っぽいじゃが芋を食べて命をつないでいる家々も少なくなかった。だから、白く粉雪が降ったように畑一面広がるじゃが芋の花や南瓜、大豆、小豆のような黄色の花はよく見ていたが、庭に咲く花の記憶はおそろしく少ない。強いてあげると、手間のかからない多年草の花、白や黄のコケコッコー花やバラ色の盆花とやまぶきの花くらいしか思い出せない。

そんなわけで春一番に見た花はピョッペ川の辺(ほとり)に咲いた澄んだ水色のエゾエンゴサクを発見した時の胸の震えを今も憶えている。川辺へ行くには、羊をつないである林を抜け、背丈よりも高い雑草をかき分けて下りた。すると、目の前はパアーッと明るくなり、息を飲んで立ち尽くしてしまった。甘い香りにむせながら夢中で両手いっぱい花を摘んだ。一しょに来られない五歳年下、四歳の妹に見せようと。妹は重い脳性小児マヒで両手はギッシリ握ったまま、首もすわらず、歩けなかった。父母にとっては不運なことに私も軽い脳性マヒと脱臼だったので、幾分歩くのが思うようにならない身だったから、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.